

佐倉市草刈堀込遺跡と縄文後晩期の集落景観 －印旛沼南岸における中央窪地型集落の表面観察－

阿部芳郎・須賀博子・小口英一郎・篠原 武・宮内慶介・吉岡卓真

要旨

下総台地中央部の印旛沼周辺地域には、縄文時代後～晩期の遺跡が群集している。これらの遺跡の中には核的なムラと考えられる遺跡も多い。草刈堀込遺跡もそのひとつであるが、この地域の多くのムラ跡は中央部に窪地をもつもので、窪地の周囲を取り巻くかたちで大量の遺物が散布するという独特の特徴がある。

小論ではこうした遺跡の表面的な特徴の詳細を検討するとともに、周辺遺跡における発掘調査の事例の比較から、ムラを形づくる高まりの多くが自然の地形を利用しながらも、盛土行為などによって人工的な高まりが生成された結果であり、同時に後～晩期集落の一形態である点を指摘した。

キーワード：縄文時代後～晩期、盛土遺構、中央窪地型集落、遺跡群

はじめに

千葉県中央部にあたる印旛沼周辺は縄文時代後～晩期の遺跡が集中する地域である。これらの遺跡群は少量の土器片などの遺物のみを出土する規模の小さな生活址とともに、居住遺構や多量の遺物を出土する核的な居住地点から構成されている。そしてこの居住地点に残された遺構や遺物からは、たとえば貝塚や土器塚などの形成が認められる。さらに、これらのあり方をやや詳しく観察してみると、この地域のムラのいくつかに、それぞれが偏在性をもって形成されている事実が浮かび上がってくる（阿部ほか2000a）。

われわれは、こうした状況を把握しながら、現在この遺跡群を構成するムラである遠部台遺跡と千代田遺跡（八木原貝塚）の調査研究を実施している。これらの調査の現時点における成果を踏まえるならば、印旛沼南岸を中心とした後～晩期の遺跡群は、当時のひとつの地域社会を形成する細胞的な単位であることが類推されるとともに、現在これらの遺跡に立ってみると、そこには地表に散布する遺物の広がりや時期、さらに土壌の性質や地形の起伏などに興味ある共通性を指摘することができた（阿部ほか2000b）。こうした状況については、すでに遠部台遺跡の発掘の事前調査において注意に上がっており、佐倉市江原台遺跡などにおいて詳細な表面調査を終えて、その成果については別途に発表する準備を進めてきた。そうした中で、同市内に存在する草刈堀込遺跡においても同様の特徴を確認するに至り、今回その踏査報告というかたちで概要と課題について報告することにした。

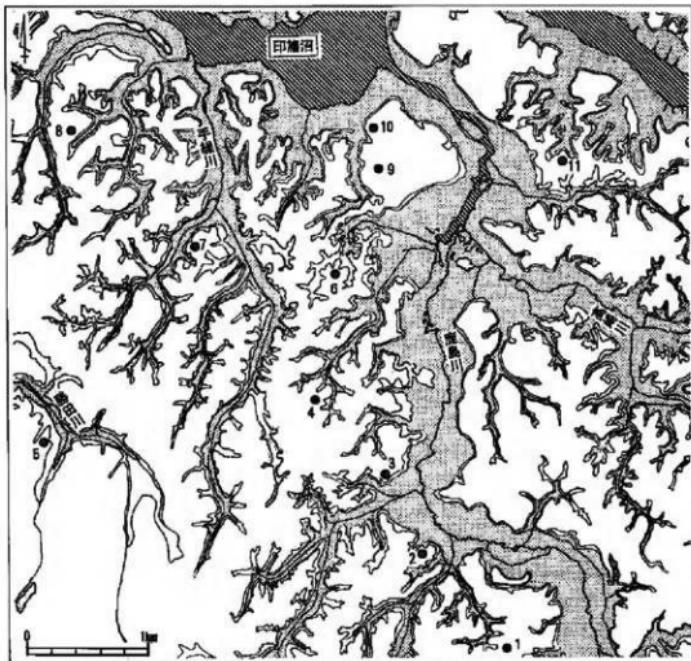
（阿部）

1. 遺跡の立地と広がり

千葉県佐倉市坂戸に所在する草刈掘込遺跡（通称若衆山遺跡）は、印旛沼南岸の鹿島川中流左岸に樹枝状に入り込む支谷によって開析された台地上の最奥部に位置する。遺跡は東西と南北が支谷によって区切られた台地の中心部に、周囲に高まりをもち開口部を北西に向けて立地している（第2図）。

草刈掘込遺跡は『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)東葛飾・印旛地区』で佐倉市内の遺跡として「Na509 坂戸草刈掘込遺跡」と記載された周知の遺跡（千葉県文化財センター1997）で、正式な調査はこれまでにないが、以前から縄文後～晩期における多くの土器や土製品・玉類などの遺物が散布している遺跡として知られていた（高橋1984）。

印旛沼南岸には土器塚や貝塚、大型竪穴建物址、「盛土遺構」、さらに大量の土偶を保有する



第1図 後～晩期遺跡の分布

などそれぞれ特色をもった後～晩期集落が、約2kmの間隔で分布している（第1図）（阿部ほか2000a）。

遺跡分布を概観すると、北からほぼ印旛沼に面する遠部台遺跡（10）や江原台（曲輪ノ内）遺跡（9）、岩名天神前遺跡（11）、鹿島川中流域に立地する吉見台遺跡（6）、千代田遺跡（4）、島越台遺跡（3）、前広貝塚（2）、草刈掘込遺跡（1）、手縫川水系に位置する井野長削遺跡（8）、神楽場遺跡（7）、さらに勝田川水系に内野第1遺跡（5）を挙げることができる。さらに草刈掘込遺跡周辺には、多くの縄文時代の遺跡が分布し、中期前半には阿糸台式期の環状集落である南作遺跡、後半には主軸貝塚が形成された坂戸念仏塚西遺跡、坂戸念仏塚東遺跡が時期を遡ながら占地を異にしている状況を確認できる。

遺跡は台地中心部に窪地を有し周囲に高まりをみせる「中央窪地型集落」（堀越1995）であり、開口部を北西に持つ。この高まりは漆黒の色調を呈する土壌が堆積し、多くの遺物が散布している。地権者の岩井氏によれば、この高まりの部分については、地表面からロームまで約1.3m程の深さがあるとご教示頂いた（注1）。正確にはこの高まりの部分の形態は馬蹄形ではなく、大きく3ブロックから構成されている（第2図）。1つは、細い路地に切られてしまっているが、ほぼ北西から南東に伸びる「北側の高まり」、北東から南西に島状に位置する「東側の高まり」、さらに「北側の高まり」とほぼ並行する「南側の高まり」である。「北側の高まり」から「南側の高まり」まで直線で約100mの距離があり印旛沼周辺の後～晩期遺跡では比較的大型の中央窪地型の集落である。



第2図 草刈掘込遺跡の立地と高まりの範囲

「東側の高まり」が開口部からもっとも奥に位置し、ここからは多くの安行式土器が採集されている。また、「北側の高まり」・「南側の高まり」は現在の国道51号線によって盛土の末端が切られてしまっているが、その断面からも盛土の形態が良好に観察できる。一方、中央部の窪地にあたる場所には対照的に遺物が少ないことが特徴であり、客土の有無を別にしても、現在われわれが調査を実施している遠部台遺跡や江原台（曲輪ノ内）遺跡でも同様な特徴をみることができる。

(小口)

2. 採集された遺物

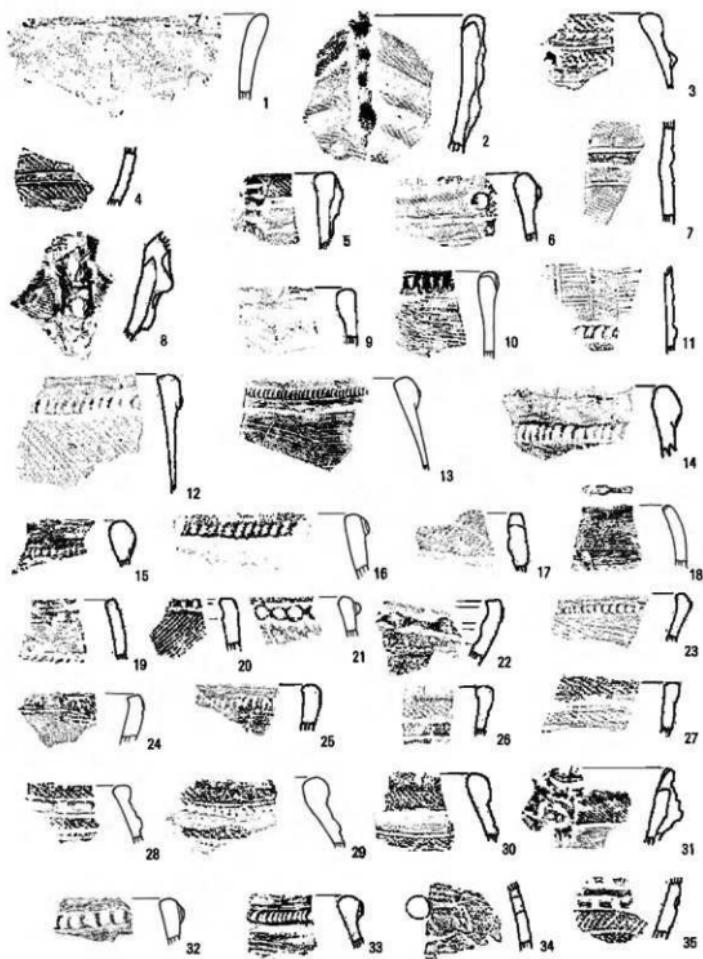
草刈掘込遺跡は3ヶ所の高まりから構成される。地点によって若干時期が異なり、「東側の高まり」からは後～晩期の遺物が採集され（1～35）、特にその中心部では安行式が多いことが特徴である（1～17）。「北側の高まり」からは中期後葉～晩期中葉（36～52）、「南側の高まり」からは後～晩期の遺物が多く採集された（53～60）。

「東側の高まり中心部」では後～晩期の安行式が多く採集された。1は頸部に沈線がめぐる加曾利B 2～3式のいわゆるソロバン玉の鉢である。2～4は安行式1式の精製土器で、2は波状線の深鉢、3は瓢形の深鉢、4は鉢と思われる。5～7は安行2式の深鉢。5は貼付部に横位の刺みが付くもの、6は帯縄文上に豚鼻状の貼付文があるもの、7は刻文帯によって胴部の文様帶を分割したものである。8・9は帯縄文が平滑化したもので、8は波状線で縦位の刺突が2ヶ所に施され、9は口縁が肥厚し縄文のみを施す。いずれも安行3a式の深鉢である。10・11は紐線の特徴から安行1式の紐線文系土器であり、11は平行線間が丁寧に磨消されている。

次に安行2～3a式の紐線文土器をみていく。それぞれ口唇の形状にバラエティがあり、極端に肥厚するもの（13・14・15）、徐々に緩く肥厚するもの（12）、肥厚しないもの（16）というように大きく3種に分けられる。紐線上の押捺は14・15が肥厚部下端に、13では肥厚部に施されている。10～15は地文に条線が施文されるが、16は縄文になる。17は小突起の付く深鉢で前浦式である。

「東側の高まり」では後期中葉～晩期中葉の土器が採集された。18～20は加曾利B式で18は口唇部に刻目をもつ無文浅鉢、19は下方に刺突がめぐる加曾利B 2式である。口縁部に刻目をもつ20は加曾利B 3式。21・22は口唇部のやや下がった位置に紐線がめぐる加曾利B 2式の紐線文系土器である。前者は口縁部内側が肥厚し、後者は平滑化した口唇部形態をしている。

この地点では、内側に肥厚させた口縁部と粘土紐を貼付せず、連続押捺を施すことを特徴とした紐線文系土器が採集された（23～25）。23は口縁部が屈曲し加曾利B 3式～曾谷式に比定される。24・25は安行1式で、24は1条の沈線がめぐる。帯縄文がめぐる26・27は安行1式。前者は内面が肥厚し、後者は角閃石を多く含む。28～30は安行式の瓢形の深鉢で28・29は帯縄



第3図 草刈畠込遺跡採集遺物 (S = 1/3)



第4図 草刈堀込遺跡採集遺物 (S=1/3)

文の下に連続刺突が沿う安行1式、30は深い沈線が描かれる安行2式。刻みのある突起と平滑化した帶繩文をもつ31は安行3a式の平縁深鉢である。32・33は予め肥厚させた口縁部に薄い粘土組を貼付し、間隔の狭い指頭押圧を加えた安行2～3a式の紐縁文系土器。34は晩期の台付鉢の台部で焼成前の穿孔がある。35は粗い繩文が施された前浦式で、文様に大洞式の影響が窺える。

「北側の高まり」では中期後葉～晩期中葉にわたる土器が採集された。36は口縁直下に沈線がめぐり、R L Rの繩文が施される加曾利E 2～3式のキャリバー形の深鉢。37は称名寺1式の口縁部である。38は口唇部に太い沈線のめぐる掘之内1式の深鉢。口縁部に横帯文のめぐる鉢形土器では、口唇部がやや先細る39と角頭状をなす40があり、それぞれ加曾利B 1式とB 2式に比定される。41は丸底となる加曾利B 2式の鉢。42は加曾利B 2式の紐縁文系土器である。43は頭部でくびれ胴部が丸く張り出す加曾利B 3式の深鉢胴部。加曾利B 3式～曾谷式に

比定される瓢形の深鉢は、刻列の下端のみを区画する44と、上下両端を区画する45がある。46は安行1式の波状口縁の深鉢。47は曾谷式に、48は安行2~3a式に比定される紐線文系七器である。49は横位に弧状の条線が施される深鉢の口縁で晩期のものと思われる。50・51は前浦式の胸部破片。52は胸部破片を利用した土製円盤である。

「南側の高まり」では後期後葉～晩期中葉の土器を主体とする土器が採集された。53は地文縄文の上に沈線が描かれた壺之内1式の深鉢である。内側に肥厚する口縁部形態で、縦方向の沈線が描かれる54・55は安行2~3a式の紐線文系土器。56は口縁部に刺突がめぐり、沈線が描かれる安行3b式の深鉢である。

またこの地点では数は少ないものの連縞と続く晩期の土器が採集された。57・58は安行3a式の波状縁の深鉢で、57は三角形区画文上に縄文が施され、58の帯縄文は平滑化する。59は太い沈線で文様を描き頭部でくびれ、60は脇曲部にやや粗い縄文が施文される。ともに安行3b式～前浦式であろう。

(篠原・宮内・吉岡)

3. 中央窪地型集落の特徴

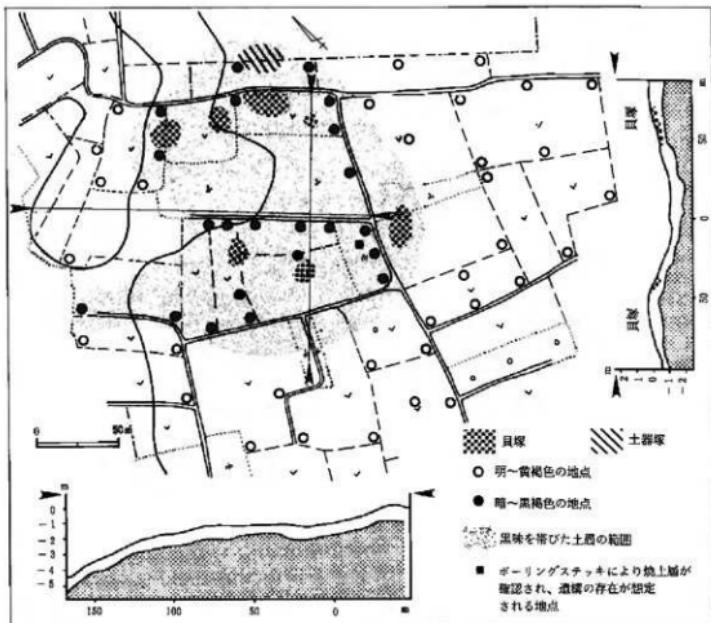
a) 中央窪地型集落の地表面観察

印旛沼南岸の後～晩期の遺跡は、地表面の観察から中央窪地型集落と考えられる遺跡が多く、江原台（曲輪ノ内）遺跡もその1つであり、從来より土器塚や貝塚を伴う遺跡として知られている。ここでは最近の踏査報告（阿部ほか2000a、阿部ほか2000b）と、畑の区画を単位とした表面踏査（1996年12月29日阿部・須賀実施）の成果から草刈掘込遺跡との比較を行い、遺跡の成り立ちとその特徴を考えてみよう（第5図）。

江原台（曲輪ノ内）遺跡は、台地の北西側から入る深い谷を囲むように、馬蹄形状の高まりをみせている。現在では農道がその高まりのほぼ中心部を通る形となっていて、中央の窪地と約1m程の比高差をなしている。

確認された7ヶ所の地点貝塚（注2）は、高まりにある東側の貝塚を除き、いずれも高まりのやや内側の傾斜面に位置する。土器は高まりの部分を中心に分布しており、特に開口部に近い北側と南側の先端部分に多い。また散布密度の非常に高い、いわゆる土器塚が北側の高まりに貝塚と隣接して存在する。地表面に任意に設定した1×1mの区画内に278片もの土器片が散布していたが、その密度は遠部台遺跡の土器家の地表面の値（1m²あたり280片）と同様である。散布する土器の主体は後期の加曾利B2式～安行1・2式であり、貝層周辺で採集された土器からもほぼ同時期に残されたものであることが窺われる。また、土器塚では、地表面に安行式もみられるが、農道に面した断面に露出した土器を観察すると、遠部台遺跡の土器塚（阿部2000）と同様にほぼ加曾利B2式土器が主体を占めていた。

一方、少量ながら前後する時期の土器も確認されており、中期後葉の加曾利E式後半から晚



第5図 江原台遺跡の地形と広がり（阿部ほか2000b. 8の図に加筆）

期前浦式まではぼ連絡と土器が存在する点も、遺跡の形成過程や継続性、遺跡群の構成という問題を考える上で重要である。また、中期後葉の土器は少ないながらも東側の高まりから外側にかけて散布が多いようにみられ、地表面観察というデータの偏りかもしれないが、時期によって分布に違いが存在した可能性も考慮に入れておく必要があろう。

次に表面土壤の色調をみると、耕作で土は動かされているにも関わらず、ローム粒子が多く混じる黄色味を帯びた土は馬蹄形の高まりの外側の低い部分に広がり、むしろ高まりの範囲内はロームが少なく土の色調が暗いことが指摘でき、その暗い色調の土は連部台遺跡の包含層と酷似し、その分布範囲に遺物や貝層、土器塚の分布が重なり、南側の高まり部分では細かな白色化した焼骨片の散布がみられた箇所も存在する。原地形が高まりを形成していたにせよ人為的な行為の結果が加わったことによって、最終的に現在地表面で観察されるような中央窪地型の遺跡が形成されたことが推測されるのである。

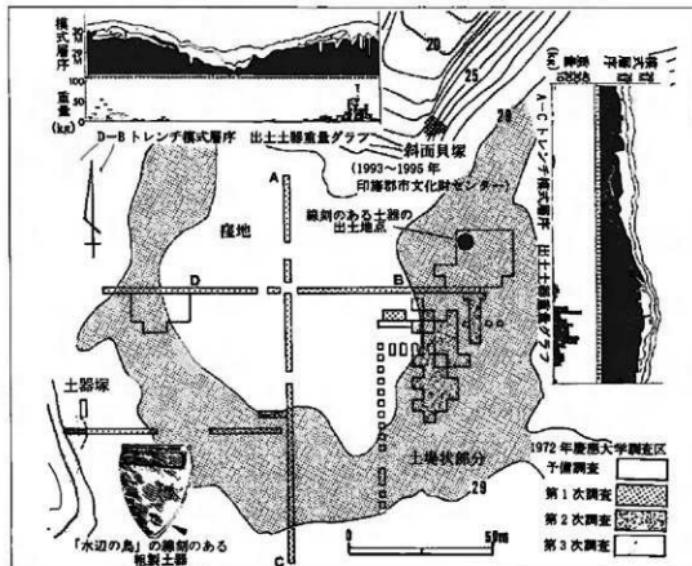
（須賀）

b) 中央窪地型集落の立地と構造

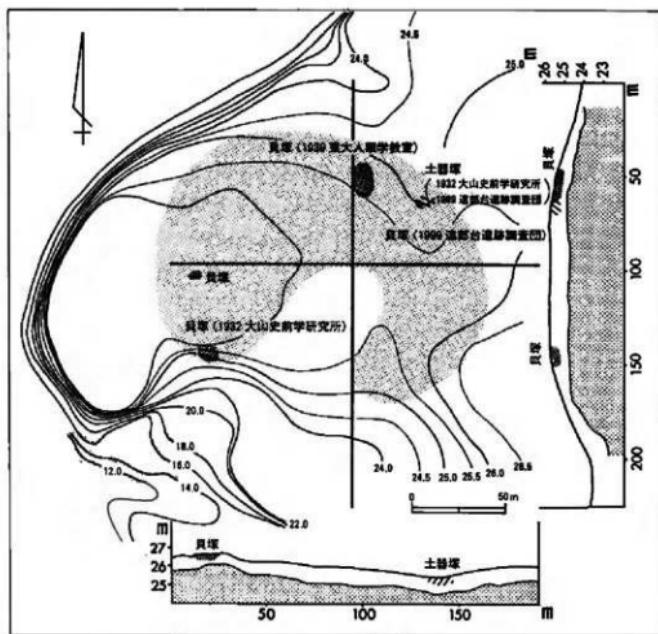
草刈掘込遺跡をはじめとした印旛沼周辺の後～晩期の集落遺跡は、現在の地表面が緩やかな高まりを形成する点に一つの特徴を見出せる。そしてまた、同じ遺跡群の内部における佐倉市江原台遺跡や吉見台遺跡、さらにわれわれが現在調査を行っている遠部台遺跡などでは、これらの高まりの一部に地点貝塚や土器塚が形成されている事実が確かめられている。

その中でも吉見台遺跡では、この中央部の窪地を中心とした調査が慶應大学によって実施されており、こうした集落の景観がローム層上面において認められるような、自然の窪地地形を取り巻くようにして形成されている事実が確認されている(第6図)。そして同時に注目すべき点は、この窪地の周囲に遺物を多量に含む包含層が堆積して、今日われわれがみるような窪地を取り巻く高まりが形成されている事実である。こうした地形の形成背景を考えるために遺物包含層と今日一般に呼ばれる人為的な土砂の堆積の実態の究明が重要となるであろう。

小論で指摘したような高まり部分の包含層の積成は、むしろ高所から低所に土砂が移動するという単純な堆積学の概念に反する現象である。吉見台遺跡の断面にみると、高まり部分



第6図 吉見台遺跡の地形と広がり



第7図 遠部台遺跡地形測量図

はローム層そのものの高まりにも増して、遺物包含層が厚く堆積しているのである。こうした推測を拠り所にするならば、この高まりの形成は人為的な所産であるとは考えられはしないだろうか。しかも、遠部台遺跡や江原台遺跡ではこの高まりに遺構や土器塚、貝塚などが位置していることになる（第5・7図）。未調査の遺跡について、周辺遺跡との比較などから以上のような遺跡構造上の特質を予測しておくことは、これらの遺跡が遭遇する将来の予期せぬ記録保存調査において、その調査方法の立案や成果の考察という点において意味のある予察であろう。

そしてもっとも注目すべき点は、こうした表面上の特徴を持ち合わせる後期から晩期にピークをもつムラが印旛沼周辺に集中して見出されたという事実である。さらにまた、これらのムラのいくつかには相互補完的な機能が予測される点はすでに述べた（阿部2000）。（阿部）

4. 印旛沼周辺遺跡群と中央窪地型集落

ムラの中心部に造構の空白地帯が存在し、その周縁に堅穴住居などの造構が位置するという構成は縄文時代前期以降のムラの典型的なかたちとされている。印旛沼周辺地域の後期から晩期のムラにも同様にして類似した形態を認め得る点のみをもって、これを縄文時代に一貫して存在した画一的な集落形態であると指摘するには、今の時点ではなお、いくつかの躊躇が伴う。

堀越正行氏はこれらを中央窪地型集落（堀越1995）と呼称して立地上の特性に注目し、筆者は後～晩期における溝れ谷を取り巻いて形成される盛土造構をこの時期の特徴的な集落形態と考え、「谷奥型造丘集落」と呼称して中期のそれとは区別している（阿部1996）。区分の理由は、すでにわれわれも指摘するように、この地域の中期後半から終末期の集落には、こうした形状が認められる場合が少ないとから、全時期に通じる一貫性に乏しいという点や、窪地の周囲の高まりが盛土造構として発達するのは、むしろ後～晩期において顕著である点などである。

この事実は何も本地域の特性だけでなく、むしろ関東地方の全体を見渡してみても、ほぼ一致した特徴と言えそうである（註3）。

その一方で、盛土を残す集落の大半が、量の多寡はある、中期後半の遺物を出土していることは、遺跡形成という視点から見た場合、中期で断絶するムラと後期以降に占地が重複するムラの2種類が存在することを示唆する。後者の場合であったとしても、中期の時期には集落であったか否かという点では、調査例の充分でない今日では必ずしも明らかではないが、中期の土地利用や集落占地とは異なる性格を後～晩期のムラは保持していたことになる。

遺跡において出土する土器型式の数や連続性を、ひとまずはその遺跡の継続期間を考えるならば、草刈掘込遺跡を含む多くの後～晩期遺跡が晩期中葉の前浦式期を境として、以後の生活の痕跡をほとんど残さないという事実も、多くの遺跡において奇妙な一致を見せている。今のところ前浦式期のムラの規模は不明ながら、後期以来連続している千代田遺跡V区や吉見台遺跡などでは住居や大型堅穴建物址の発見があるので、集落は同じ場所で継続していたと考えてよい。しかし、前浦式以後になると、土器片さえも台地上にほとんど残すことなく、遺跡は激減するという現象に、占地を異にして低地へと進出したという拙い憶測以外に、具体的な事実を根拠として掲げて、説得力をもつ説明の術をまだわれわれは持ち得ないでいる。後～晩期の谷奥型造丘集落の終焉という問題については、いま述べた大きな課題が横たわるが、少なくともこうした遺跡の形成時期と集落景観といった点については、驚くほど良く似た構造と消長をもつという点は、この地域の遺跡群の成り立ちを考える場合に、重要な示唆を与えているように思われる。

小論の作成において、以下の方々に多くの教示とご配慮を得たことを明記し、感謝の意を表したい。岩井 明、内田儀久、高橋健一、高橋 誠、新田浩三

なお、小論の内容については遠部台遺跡調査団において検討を重ね、いくつかの討論の過程

を踏まえて作成したことを記し、同時に積極的に調査や検討に参加してくれた学生諸君にも感謝したい。本論は2000年度文部省科学研究費基盤研究C（研究代表者 阿部芳郎）による研究成果の一部である。

（阿部）

註

- 1) 地権者の岩井明氏からは、氏が所有されている資料を実見させていただいた。資料は加曾利E式後半から前浦式までみられ、その中でも安行式が多いことが特徴であった。また、多量の磨石・敲石類や黒耀石・チャート製の石器や剝片・石核も採集されている。このような剝片石器類が顕著にみられる同時期の遺跡として、佐倉市神楽場遺跡が挙げられる（阿部ほか2000a）。
- 2) 阿部ほか2000bで示された5ヶ所に加え、1996年12月29日の踏査時に別に確認できた2ヶ所の貝塚を含む。
- 3) これに類似する後期以降の盛土遺構の形成としては、栃木県小山市寺野東遺跡が著名な一例である。

参考文献

- 阿部芳郎 1996 「縄文のムラと「盛土遺構」－「盛土遺構」の形成過程と家屋構造・居住形態－」『歴史手帖』24-8 名著山版
- 阿部芳郎ほか 2000a 「縄文後期における遺跡群の成立と地域構造－印旛沼周辺遺跡群の踏査と研究の成果－」『駿台史学』109
- 2000b 「遺跡研究の目的と方法を考える－千葉県遠部台遺跡における縄文時代後期の土器塚の形成過程の解明を主題とした調査研究の事例から－」『駿台史学』110
- 阿部芳郎 2000 「縄文時代における土器の集中保有化と遺跡形成－千葉県下総台地中央部における後期の遺跡群と土器塚の形成－」『考古学研究』47-2
- 江原 英 1999 「遺構研究 環状盛土遺構」『縄文時代』10
- 高橋健一 1984 「千葉県佐倉市草刈掘込遺跡出土の遺物」『奈和』第22号
- 千葉県文化財センター 1997 『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)－東葛飾・印旛地区(改訂版)－』
- 堀越正行 1983 「谷戸貝塚の意味するもの」『史館』15
- 堀越正行 1995 「中央窪地型馬蹄形貝塚の窪地と高まり覚え書き」『史館』26